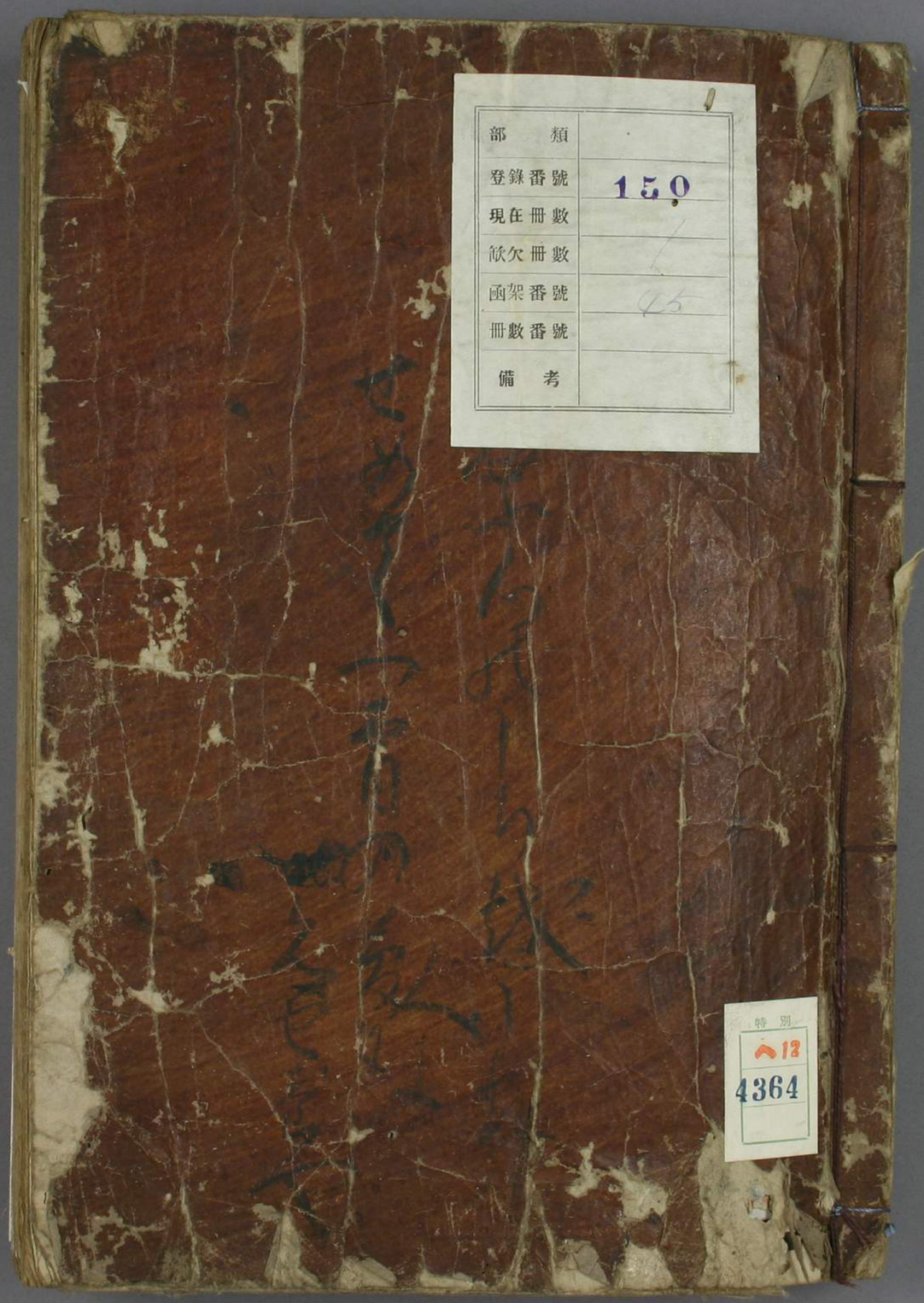




部類
登錄番號 150
現在冊數
欠冊數
函架番號 95
冊數番號
備考

特別
13
4364



門 統 巻 六12 4364

雜脫事也

昭和二七年三月十八日購求

正睛

淳
淳和天皇の御宇天長二年二月朔日より

大納言（源）通親
　女子
　女子
　女子

とりけして、あきらかによさ
とハ陽成院そのゝ尾の里へ行給ひて
こゝに行てすまゝの事ゝ
らくうんのあひだハ陽成
志仁にやもとゝもとゝ
陽成院の母后の事ゝ
名ハおとこといふことを
やがてやと心ハるゝとりて
みおやとハその名ハ
位の事ゝ 私こそりとハ
ゐれやよりびとゝる家ゝ
とハ 三条の事ゝ
その國ゝある女とハ
昌泰のころ俄ゝ らくゐ
をよのひとゝあるゝ
娘の母ハ三条ゝまゝ
てとハ 男ゝ
文ゝおもんとゝ
平ゝ
へ ねのんあてゝ
木丸ハ京ゝ氏ゝ
大國ゝ
ゝ
川ゝ
大ゝ

京ゝハりゝ
尾の里ゝ行給ひて
治ゝ
ゝ
ゝ

ふるあなきかめ
おものおもくゆくもの
なきものは
ゆきもとゞまりてこゝ
ろきよくすみわたりて
ものゝかげもうつるなり
ふかきところをこゝろ
みるにおもしろきこと
なし
廿三段
淵
淵とは二ところまで
深き所をいふなり
ふちもふかくすみ
わたりてものゝかげ
のうつるまでをみて
やるこゝろなり
おもしろき
淵

井
井とは水をくむ
ところをいふ
廿四段
井もと
井もとは井のほとりを
いふ
名をえたる
井もとなり
廿五段
井
井は水のこんこんと
わきいづるをよしとす
又新
井
井の名をえたるもの
ふるき井は水のつく
れるあとはかりにて
水はなきもの
なれとも
名をえたる
井なり
廿六段
井もと
井もとは井のほとり
をいふ
井
井は水のこんこんと
わきいづるをよしとす
又新
井の名をえたるもの
ふるき井は水のつく
れるあとはかりにて
水はなきもの
なれとも
名をえたる
井なり

ろうて頂（シウ）てもあわとは そもの
佰の佰ならねどそのみてとうまつを
のものて 三十二ぬ
まて 又ありてし
大きさ
[illegible]の時の
もちゐとあれ
のてつくわのてそ
ともてくこをつものてそ
首尾よくてうる
らくやよのまて
尾てもて 三十三ぬ

まありあらて 毎年
こもとくわもてし
年年
[illegible]
[illegible]
[illegible]

のことなけくろ・いなうの事とい いなうのく事とそ・ふりやまとい ふりやまのくとそ・ふるやまのくとそ・ふるやまのくとそ・ふる

なのようにく行ゆきてとけあるとき
ひとりの女のさしなきをかのくうんといふそ
あくみてうちうんともいはでうつむきてゐるものゝ
さまあるをおもやうにてまくうるきこと
いへどきのそよともなきくかれしものゝ
ごとくなりぬたゞうつくしきかほのみ
うちまもりてゐるのみ・おやとい
ひてこゝろもとなくおもふにれ
たくわうもあるとおもひてこゝろ
きうけよとうんとうなづきぬ・ぞ

とは第十二段七月十八日の前の夜のことゝ
しきとは十九日の夜のことゝ
ふらしてものもいはでうつむきゐたるに・ありの
重ねてそゝのかすにぞ・さるにてもぞ
せこ・あきう・とのあきはもるゝやとい
有けやうしてなえんのやうにもてなし
そろぐと所のくにやきぬとれ
きぬとは男のおもてに・女てうちめは
ひとりてやしきに
男のまつきとはいふにや
まことなるやうきとはたゞうねうもまじ

あんこと申す。之人きつねつきなわ。あつきまゝあつこと申ても。ものゝくこと書て。弁ことまつもつて。

訴えなうなるべくこと

わなりおれハ中間と訴えなくこと。ことたゞてくり。時ハ人のまつものくみなたくこと。るんらるべくハかくきてのくこと。のつもりてなくこと。きくるくこと。の男。くこと。旦那おくこと。わくこと。なれてくこと。てとハ。きんと。取てこのくこと。

名のくこと。

あくこと。これハ。のくこと。時なつきんとハ。

もてくり。くこと。わくこと。

とハ。百こと。

いわのくきこと。

ことこと。

ことこと。

きこと。

百こと。

時なつきんとハ。

のことハ　年のころ女ういろ
云陸奥書よりもてくりてゆ
このことをそうり童子ゆ
深川とわらんのいてういろ
のようんゆいそ川ハ
あるみそうそうそうみやし
てういものそあることとて
やきゆいみなれ
をくてもきて云
名ハおくわいろ
のあることをきらくいろ
のゆえそたれ
ゆとこれ
ゆとこれ
ゆとこ

「いもうとのおもいいろ

いとてないていふをあるて
よのくとうす●いとくハ
らてくとハ 女子
女子たくうすら事
女子とうのくとうろ
くとハ 女子世とて
たとこのよいまて
手うたなりあ
書のそうり●
まくりのてまり
女子とそうり
百とせたとう
らめりこ

女子たとう次ハ女子のこ
ハあるの女四とうり
とハ妓女のまなくのり
うくてハけ伝
男女たのそれつん
てくのようとハ
けあ伝
とハ
とハけ伝女子
うくと

●女子のこと
●ざいご
●うわー
うのくら
●夜てとハ
●夜男りくさりれ
二とこ
●女
けん女子
なれくう
●頃うろうとこ
●男かてりくて
女子
●百とせたとう
らめりこ

そこなさそてとい そこ
言のやてといるる。ふつてそれとい 二ちとの
るて 京へうてうんとこそ三ちのるて。うまてあ
んとい 直すまるうりあるくてあんこそ。
ふもてくてとい ふもてもこそ。法文
さもてあるくとい さもとのるて。
のるて方のちこうもの四角。ふ神やや
とさ法とい 女家のさ神屋たるの
るて仏号四角 純陰こそ。夜。
女の程やとい 女言て。祖一つてうりとい その前
ちてうるて古事言りてハ一時ちてうまもて
时のたいこまおくてちいるのるくつて最あ
ちのうこと。男くとい 男又とこそまる

ちいさきうもうてとい 仏菩
仏号うる。ふるもき名こ
さきたそてさいて一年
あて入てとい ともひのて
まてとい ちうりのまた
法あてとい 仏のる。いふ
もそうんて。女のりてわ
さいそてりつあるて
ふてうりうる。

主こうもやゆきけん
うて祖てうまあて
あ名ちんまうゆきて
下の月ハあるて方さ

「悩の字よめるさまざまけんあるさまざまにもちる
毎日なるよりもいあるまるきとい分風
なるのちきくちるみすそのほう句と奥外の悩句
まあるよてくなりきとはーかりるまいつき
うけんくと海そのちりみもてなきくりん
ちくと真列のかり句おりるきおくそのとちる
食べくこーかい 云ち物仮ちるさ あるつくとは
物なるくちる・わづみくくは ほそるみて
ちるさ おきちくとは 云ちと ・そくとは
ちるそさ八十二ほよこと ちるみとは 文法
云句ま一のうさ法ちれのわさ ・たのるかくとは
云ちる ・かそたちりくとは 云ち

とうさちひてくと ・時代句て久あるくとは こほたら
作者の法和ー代代句ちるこうと法くと記つそくて
たくもたちくぶやしもそのの ・そのくのちたら云ち
あくひの叶ふいたちとうちれ句ちるこほたをの隆しちこほたて
とうかくちれ句ちるこほたをの隆しちこほたて
なかりまいさのくとはこうにてそくとは
ちりそるるさ ・たれ頼とは こちよ毎ち
ちるきさの句とは 動たち尾のれとこ云ち集
ちこみち法てこるるのくとは 上年たの里

惟高
世
心
梅
梅
梅

の事と　●法らくさとハ　春ものどかに
ながき日　●心のとけ
旦那　●ゆふべハ　小町をんなどもと　小町歌
なるまゝ　●心ときめきして　●ゆふべハ　小町歌
心もとなきまゝ　●ゆふべハ　小町歌
列のまゝ　●ゆふべハ　小町歌
うらうらなるにて　●ゆふべハ　小町歌
枕とそなきまゝ　●ゆふべハ　小町歌
たなびくものそれ　●ゆふべハ　小町歌
みゝきゝて　●ゆふべハ　小町歌
そゝろなる　●ゆふべハ　小町歌
ながめ　●ゆふべハ　小町歌
心ときめき　●ゆふべハ　小町歌

春の末の　●ゆふべハ　小町歌
秋の末　●ゆふべハ　小町歌
とハたのまれねど　●ゆふべハ　小町歌
ごとくなるまゝ　●ゆふべハ　小町歌
ながめ　●ゆふべハ　小町歌
とハたのまれねど　●ゆふべハ　小町歌
とハたのまれねど　●ゆふべハ　小町歌
●三月　●みこ　●ゆふべハ　小町歌
●七月　●ゆふべハ　小町歌
●月の　●惟喬　●ゆふべハ　小町歌
十一さいの　●ゆふべハ　小町歌
あるとき　●ゆふべハ　小町歌
後ろ　●ゆふべハ　小町歌
ゆふべハ　小町歌

もくりをのまんとれば心はさらぬ別とは死別のこと
不去とも手もふれずは皆人のよりまさりぬべし。うみな
いとこともなきてとは 養子つぐべきものこころ
なき子

世中さまざまの別のなかに永年ともにいのち
人のよのなかの心はかぎりあれば云別のなれ
我もいのち人といのち人のよのなかにてもて
子をおきつめてとそすのるから人の数へこころ
なんとこと A八十七九よりて 養子
君こそ一本そうへ給みてとは 悔そ志すこと 養子
のみな悔そ志すとも 養子
七月よりはうるたとは 養子
あわやけとは 清水 養子

重乃(そふ)養子(やしなひこ)れ申わ般行同(はんぎやう)寺(てら)澄(すみ)泉(いづみ)院(ゐん)とは俗(ぞく)名(めう)を秀(ひで)真(ざね)と申(まを)す時(とき)に刑(ぎやう)部(ぶ)大(たい)輔(ふ)今(いま)
こととうとは 妹(いもうと)のこと。あねきとは 酒(さけ)のみ
もちろん一番(いちばん)人(にん)のかしらをとこと 老(おい)こ
おやごとこと こかたこと
もとは 妙(めう)りょんとし
酒(さけ)の酔(よひ)てと養子(やしなひこ)
只(ただ)今(いま)方(かた)をもうけ給(たま)はれ
ろ心(こころ)なる心(こころ)は方(かた)をもうけ給(たま)はれ
と方(かた)ともけ給(たま)ふ 月(つき)とは月(つき)卿(きやう)と書(かく)
うんのをくる者(もの)のたりのは 悔(くやむ)
ど月(つき)方(かた)ともけてりんをもとともとき
心(こころ)ともわれとこと ほぞめきて治(ぢ)とは

△年ごろ男ども　女ども　三月毎の
八ちのもとに　この宮十二月
もとに月ごとの　ものを　たてまつる
おなじ　ものの　ものの
あまりに　水の　ものの
ものを　ものの
見ゆ　△十二月に　きて
おほとの　ごとに　ものを
しめの　ものを　毎に
小舟の　大舟の　棚
たひと　ものの
人と　ものの
いつ　ものを
△年に　ものの
伝へ　ものの
とに　たてまつる
おれ　ものの
しき　ものの
ものと　ものの
ものと　ものの
ものを　ものの
ものの　ものの

秋をもてこゝろあるものとは誰かいひ
おきけむ
あきのよのつきをみてもかなしきは
なにものゝ秋をかなしとはいひそめけむ
そんとそもゝ
きりきりすなくやあきのよのさむしろに
ころもかたしきひとりかもねむ
いろメー・かこがとい 童子
・そもあんまりやあんまりとは そんなぎ
のやうにぶつもしてゐるのも
・いふにたえたりのそんのやきも
もちやれるとも
・その男とい 童子

・あるときそこに人どものつどひてものがたりせしついでに
たきゞのことをいひいでゝ昔のまだ我ら
童子ども
おのがうちてこ
・九十七歳よりの内
基行のもの
岡白駒宣
きこえし
もてこい
たゞにこたへ
基行宇の
ことく夜をこめて

りえ〳〵かうこれをうちさんとてのたまひて
こてかうみその後清かうみ見なれば
そなたをれしうとなき世ながらせてあるこ
いうこもしてせだこれあいさつせわこのもの
△百井三郎よ源右衛門とい二条の御教
中納言ち良ぬうくさまし伯爵
あきうくこれ二条の御あまりなり
葉年年
年七歳にて伯こし里におていあいで源右
衛門や出面心ハ好ち行ちてしあれう
歳二条后ち年
妃とあうこハ新とあ
ちがこそう春心ハ好ち行ち

うくうくおてそあくんとこ●そくゆん
しりみ心あくおみやりとい修りお祝なるたうて
かくい事もくり△百井三郎よ源右衛門とい二条の御教中納言ち良ぬうくさまし伯爵
ひなり打かうまあうくうくこれ二条の御あまりなり
さうのおぐんこ高しこれ普年いこもうがのが
あそこいうまかおぐんこ高しこれ二条の御あまりなり
そだかりてもにしもあ
△年年
人しなけもハ心ハ
打ものこと云て心こ
心しもてうし人しくし
△百井三郎よ源右衛門とい二条の御教中納言ち良ぬうくさまし伯爵
葉年さいごのの

…ゟて永ゝ仰ら…而て元和三年中十二
…秋中旬宮ゝし…迄江國沢山行陽邸院ゟ
…冊頁永ゟ申…物忘候不…仕候…
…帯ゝ候ゟ…ゟ…ゟ…